慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ドイツ文化論講義の方法について
Sub Title	Über die Vorlesungsmethode der Einführung in die deutsche Kultur
Author	坂口, 尚史(Sakaguchi, Naofumi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2001
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・ 文学 No.32 (2001. 3) ,p.115- 127
JaLC DOI	
Abstract	1993年からスタートした新しいカリキュラムに「地域文化論(1)」「地：域文化論(ID」と称する新設科目が，日吉1，2年生のための人文科学系の科目として入った。法学部が設置し，(1)は春学期(前期)，(II)は秋学期(後期)に開講され，それぞれの学期末に定期試験を実施して，学期ごとに2単位となる。しかしゼメスター制度は，法学部の政治学科が中心であるので，政治学科の受講生にだけ9月に春学期の成績が知らされる。法学部法律学科や，経済学部，商学部の受講者についても春学期の成績として出ているのであるが，受講者が成績を確認できるのは，翌年の3月である。 制度上の統一がとれないのが残念であるが，オム二バス形式ではなく，一人の担当者が少なくとも一学期を通じて講義するので，イギリス，アメリカ，フランス，中国，ロシア，スペイン，東欧の七地域の文化論講義を，法学部，経済学部，商学部，医学部の受講者が多数聴講している。ただ，東欧については担当者の都合もあり，途中から開講されなくなった。 筆者は1996年度から「地域文化論」(1)(II)を8学期担当した。法学部ドイツ語部会から最初に小名木栄三郎先生が担当され，深田甫先生が担当された年もある。両先生ともすでに退職されている。ドイツ，オーストリア，スイスのドイッ語圏を視野に入れて，(1)はドイッ文化入門を，(II)は(1)の講義の中から少し具体的に，ある時代，あるテーマをとり出して，□それぞれ12回ほどの講義を行う。聴講者は必ずしもドイッ語の履修者ばかりでなく，フランス語，スペイン語，ロシア語などドイツ語以外の外国語を履修している学生も多い。2000年度の秋学期については，受講者数は190名に達し，アメリカ，イギリスに次ぐ大きなクラスとなっている。しかしこれは必ずしも，ドイッ文化に対する受講者の関心の高さを意味しない。講義の主旨を反映して1年生が多く，法学部法律学科42名，政治学科40名，経済学部15名，商学部15名，医学部1名であり，2年生も各部あわせて77名来ている。 講義の主旨というのは，この時間が例えばドイッに関していえば，「30年戦争」がいっの時代にあったのか，「ローレライ」とはいかなる歌か等にっいて全く知らない学生が多くいるという，最近の大学生の現状に端を発して設置されたものである。外国語を学ぶ人が，その国の言葉の背景をなす文化について，外国語の授業では説明されない部分を講義科目で学べるように，また他の外国語をとっている人もドイッ・ オーストリアについての知識を得てロマンス語圏の文化と比較できるようにとの目的をもって設置された。さらにそのテーマが日吉2年生の「人文科学特論」につながり，三田へ行って3，4年生のたあに設けられている 「人文科学研究会」に受けっがれるという意図もある。理想どおりにはなかなかいかないとしても，社会科学を中心に学ぶ学生にも，人文科学をできるだけひきっづき研究してもらうための第一段階という役割を担っている。このため法学部では，旧一一般教養科目の中の「人文」，「社会」，「自然科学」という枠づけは保持されているのである。人文科学が3，4年生にまでのばされたかわりに，専門科目が日吉の1，2年生に，以前と比べてかなり降りてきているので，履修する方もうまくバランスをとっていかなければならない。これはかなりの難問である。
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper

URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20010331-0115

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

（研究教育報告）

ドイツ文化論講義の方法について

坂　口　尚　史

はじめに

1993年からスタートした新しいカリキュラムに「地域文化論（Ⅰ）」「地域文化論（Ⅱ）」と称する新設科目が，日吉1，2年生のための人文科学系の科目として入った。法学部が設置し，（Ⅰ）は春学期（前期），（Ⅱ）は秋学期（後期）に開講され，それぞれの学期末に定期試験を実施して，学期ごとに2単位となる。しかしゼメスター制度は，法学部の政治学科が中心であるので，政治学科の受講生にだけ9月に春学期の成績が知らされる。法学部法律学科や，経済学部，商学部の受講者についても春学期の成績として出ているのであるが，受講者が成績を確認できるのは，翌年の3月である。

制度上の統一がとれないのが残念であるが，オムニバス形式ではなく，一人の担当者が少なくとも一学期を通じて講義するので，イギリス，アメリカ，フランス，中国，ロシア，スペイン，東欧の七地域の文化論講義を，法学部，経済学部，商学部，医学部の受講者が多数聴講している。ただ，東欧については担当者の都合もあり，途中から開講されなくなった。

筆者は1996年度から「地域文化論」（Ⅰ）（Ⅱ）を8学期担当した。法学部ドイツ語部会から最初に小名木栄三郎先生が担当され，深田甫先生が担当された年もある。両先生ともすでに退職されている。ドイツ，オーストリア，スイスのドイツ語圏を視野に入れて，（Ⅰ）はドイツ文化入門を，（Ⅱ）は（Ⅰ）の講義の中から少し具体的に，ある時代，あるテーマをとり出して，

それぞれ12回ほどの講義を行う。聴講者は必ずしもドイツ語の履修者ばかりでなく，フランス語，スペイン語，ロシア語などドイツ語以外の外国語を履修している学生も多い。2000年度の秋学期については，受講者数は190名に達し，アメリカ，イギリスに次ぐ大きなクラスとなっている。しかしこれは必ずしも，ドイツ文化に対する受講者の関心の高さを意味しない。講義の主旨を反映して1年生が多く，法学部法律学科42名，政治学科40名，経済学部15名，商学部15名，医学部1名であり，2年生も各部あわせて77名来ている。

講義の主旨というのは，この時間が例えばドイツに関していえば，「30年戦争」がいつの時代にあったのか，「ローレライ」とはいかなる歌か等について全く知らない学生が多くいるという，最近の大学生の現状に端を発して設置されたものである。外国語を学ぶ人が，その国の言葉の背景をなす文化について，外国語の授業では説明されない部分を講義科目で学べるように，また他の外国語をとっている人もドイツ・オーストリアについての知識を得てロマンス語圏の文化と比較できるようにとの目的をもって設置された。さらにそのテーマが日吉2年生の「人文科学特論」につながり，三田へ行って3，4年生のために設けられている「人文科学研究会」に受けつがれるという意図もある。理想どおりにはなかなかいかないとしても，社会科学を中心に学ぶ学生にも，人文科学をできるだけひきつづき研究してもらうための第一段階という役割を担っている。このため法学部では，旧一般教養科目の中の「人文」，「社会」，「自然科学」という枠づけは保持されているのである。人文科学が3，4年生にまでのばされたかわりに，専門科目が日吉の1，2年生に，以前と比べてかなり降りてきているので，履修する方もうまくバランスをとっていかなければならない。これはかなりの難問である。

★

さて，「地域文化論（Ⅰ）」（ドイツ文化入門）をどのように講義するのか。講義を担当する方にも難問がある。12回で何をどのように語れば，ドイツ

語文化圏の文化の魅力が伝わるのだろうか。地域文化論の専門家はいない。外国語科目の担当者がそれをやらなければならない。外国語の担当者は以前において，外国語の初級と中級を教えるのが主な仕事であったのだが，ここに講義科目を持つことになり，これまで語学教育に安住してきたことが反省の材料となっている。

小論は，「入門」の講義内容を紹介して，次期担当者の参考にしていただくとともに，また別の視点からご批判を仰ぐためのたたき台である。

恒例になっている4月のガイダンス・ウィークでシラバスを配り，30分余で春学期の内容を説明し，同じ時間帯の秋学期の内容にもふれておく。今年度は「ドイツの古典主義とロマン主義」である。受講したい人が集まった（登録も終った）第2週で，アンケートを実施し，「ドイツ・オーストリア・スイスの文化についてどんなことを知っているか」をきいてみた。予想できたことではあるが，積極的に知っていると書いたケースではやはりドイツ文化を代表する音楽についての感想が最も多い。ベートーヴェンやバッハなど，クラシック音楽がドイツ文化を代表すると考えている人がいる。その一方で，文化を食文化やスポーツであると考え，ビールやソーセージ，サッカーのブンデスリーガをドイツの文化であると考えた人もいた。また20人ほどはアドルフ・ヒトラーの話を聞きたいと書いてきた。

全体としてドイツの文化ときいても，イメージがわかず，何があるのかはっきりしないという，きわめてあいまいなアンケートが半数ほどある。文化そのものに対する関心が低く，学生はどんどん文明化しているのではないかという想像が，過去3年の講義経験で強くなってきている。この傾向は21世紀になってますます強くなるであろう。「ヨーロッパ連合」（EU）が発展していけば，もはや「ドイツ文化論」ではなく，「ヨーロッパ文明論」といったテーマに変わっていくかもしれない。そうなると文化論の意味は失なわれてしまう。

以下に述べるのは12回の春学期講義のあらましであるが，ほぼ予定どお

り消化でき，また受講者が私語もせず静かに聴いてくれたことを喜んでいる。もっとも，受講者が退屈しかかったところで，3分間ほど音楽を聴かせるという手を打つことを，ガイダンス・ウィークで約束し，まずはマルティン・ルターのコラールを聴いてもらった効果が，少しは有効であったのであるが。

〔**第1回**〕 ドイツ連邦共和国の地図をコピーして16州を紹介するとともに，各州のワッペンと州都，面積，人口を示した。ドイツの大まかな地形と，気候を簡単に説明し，後に登場する著名な文化人の出身州をなるべくまんべんなく紹介した。バッハはチューリンゲン，ルターはザクセン・アンハルト，グーテンベルクはラインラント・プファルツといった調子である。そして今日のテーマとして，「文化」(Kultur) と「文明」(Zivilisation) を対比させ，文化という言葉の定義についてふれた。ラテン語の cultura には，「耕す」，「精神を培う」，「神への崇敬を培う」意味があり，野蛮に対して人間性を保持することが文化であり，同時にそれが精神的な民族固有の傾向を示している。それは他国へ輸出できないものである。これに対し文明は18世紀に生まれた言葉で，普遍性をもち，どんどん他国へ輸出できる。

一部の受講者に関心の高いヒトラーは，「野蛮」(Barbarei) と定義づけ，文化の破壊者と名づけておいた。以後ヒトラーの話はしないで済んだのであるが，秋学期の「地域文化論（II）」の講義の中で，ロマン主義を扱ったときワーグナーをテーマにとりあげたので，「バイロイト音楽祭とナチズムの関係」について，40分ほど説明したが，やはり興味深く聴いてくれたように思う。ワーグナーとヒトラーのナチズムがどのように関わったかという問題は，21世紀においても考えていかなければならない問題であると考えた。[1)]

これに対し「文明」は，宗教，芸術，学芸などの文化に対する，人間の技術的，物質的所産であるととらえられているので，[2)] 田舎に対する都会，未開社会に対する発達した社会の例を挙げ，18世紀に文明の概念が確立されたとき，近代市民社会を支える科学技術が文明として考えられたことを強調した。また，司馬遼太郎の講演から，文明には普遍性があり，輸出できると

いう話，シーザーがローマ文明をガリアにもたらして，「飼いならしのための原理体制」を用いてガリアを征服した話をつけ加えた。[3)]

〔**第2回**〕 前回の講義により，「文化」をドイツ個有のものと考えて，宗教（Religion）を文化論の柱としていく方針をとった。本日の資料には，オーストリアの9州の地図とスイス連邦の26州など，両国の資料と，キリスト教の教会暦を載せた。キリスト教とドイツ文化とのかかわりから始めようとする意図からである。まず，本年2000年の教会暦を日付で示して，三大祝祭日をはじめ「東方の三博士の礼拝」（1月6日の「公顕節」），「薔薇の月曜日」（3月6日），「昇天祭」（6月1日），「待降節第一日曜日」（12月3日）までを含め，原語も記載した。ドイツ語を履修している人が多いためであるが，試験には原語で出さないことを約束した。教会暦の内容を説明するには，民俗学（Volkskunde）の知識も必要であり，詳しく述べようとするとかなり大変である。ごく簡単に済ませたが，これで少なくとも，「東方の三博士とは何ですか」という質問は出ないであろう。過去にドイツ語の授業中にこの質問を受けたことがあり，これは大変だと思ったことがある。

katholisch と evangelisch については両派があることと，ドイツ，オーストリア，スイスにおける両派の分布を説明しただけで，今回は終り，ここまでが4月である。

〔**第3回**〕 5月に入ってこの後をどのように続けていくかについて，いくつかの方法があるだろう。現代を中心にして，現代のドイツの教会のあり方，文化施設（劇場や歌劇場，美術館），大学や学校を説明していく方法もある。筆者はずっと，歴史的枠組を設定し，5月4回，6月4回，7月2回で，18世紀の半ばまで到達する。すなわち，文化史（Kulturgeschichte）を述べる方法である。もっと進めて20世紀にまで行けばよいのであるが，本年は秋学期の「文化論（II）」で，ドイツの古典主義とロマン主義をテーマにするので，春学期はここまでにとどめて，秋学期につなぐことにした。

今回から，ドイツ人の祖先であるゲルマン民族の信仰にふれて，キリスト教化がいかに行なわれたかを講義するのであるが，音楽の方はグレゴリオ聖歌を用意し，聖金曜日の聖歌「見よ，十字架を」の一部を聴いた。ラテン語の歌詞は紹介せず，ベネディクト派の北ドイツ，ミュンスター・シュヴァルツァハ修道院聖歌隊のCDを用いた。学期末の「アンケート」によると，何を歌っているのか知りたいと思ったとの意見があり，次回から歌詞も講義資料に入れるべきかと思う。修道院というテーマで，カトリックの文化を語ることもできよう。ドイツ史の中世の研究者だったらそれも可能であり，ベネディクト派について詳細に語れたであろうが，筆者には不可能であった。

古代ゲルマン人の宗教について述べるにあたり，キリスト教の聖霊と，ゲルマン民族の民間信仰の対象である精霊の違いを説明した。この間違いが過去の試験問題に多く見られたからである。ハイネの「精霊物語」(Elementargeister 1835 翻訳 岩波文庫 1980) を参考にして，文献にも挙げておいた。ニンフ，ウンディーネ，ザラマンダー，コーボルト，ツヴェルク等の話は，グリムのメールヒェンに登場することもあって，かなりの受講者がこのテーマに関心を示した。目下絶版となっている岩波文庫を買いたいという人も現われた。岩波文庫には，文化論の参考文献が多く入っているのであるが，なかなか入手できないのが残念である。現代日本の文化現象として，このような良い参考文献が入手不可能となっていることがあり，改善が望まれる。

キリスト教の普及とともに滅びた古代ゲルマンの神々について，アイスランドで発見された「エッダ」から，ヴォータン，フリッカ，ドナー，フライア等，北欧神話の神々も資料に記載した。ワーグナーの楽劇「ニーベルングの指環」の第一部「ラインの黄金」のリブレットを，これらの神々の名といっしょに紹介したが，神話的な素材も受講者には人気がある。

一般的に言えば，キリスト教的な内容よりも異教的な内容の方が，受講者には受け入れられやすいという傾向があるのではないだろうか。その意味で，ゲルマン民族をキリスト教化するのに尽くして，そのために「ドイツ人の使徒」とよばれる聖ボニファティウスの生涯と業績について語ることはぜひ必

要であった。744年に創設されたドイツ最古のフルダ修道院は，幸いにして一度訪れたことがあり，そのときの印象を混えて講義ノートを作り，異教徒に殺害されたその悲劇的な死についてもふれた。フルダ修道院でみた聖ボニファティウスの大きな像が心に残っており，キリスト教化されていくドイツのシンボルのような存在になっていると思われる。

〔**第4—第6回**〕 5月の残る3回のテーマは，キリスト教化されたドイツにおける，キリスト教文化についてであったが，一つだけ異教的要素の英雄叙事詩「ニーベルンゲンの歌」を取り上げた。

まず，「聖書」について，とくに旧約と新約のちがい，前者がヘブライ語後者がギリシャ語を原典としていること，およびその成立のしかたを問題にした。話の中で仏教の聖典との違いにふれ，その歴史的性格の相違点は，Bibel が AD 2－3 世紀に輩出した一群の人たちによって，異端を廃して300年頃成立したのに対し，仏教教団には本来，「神から発したとして重要視せられる権威」から成る「神政社会形態」[4] が存在していなかったことである，とした。しかも仏教には，仏陀が死去して約500年もたって形成された大乗経典があり，異民族の文化の影響を受けるところも大きい。「聖書」に見られる，一神教的な世界観は仏教にはなく，他宗教を認めないその教義については，旧約聖書のモーゼの十戒を例にあげる程度にとどめた。聖霊についての説明もとくにしなかったのであるが，「聖霊とは何か」について講義後に質問を受けたことがある。文化を述べる際の難問である。

キリスト教の文化については，教会建築にみられる，ロマネスク，ゴシックの建築様式を覚えてもらう必要があると考えた。このテーマはあるいはヨーロッパの美術の担当者に譲るべきかとも思うが，ロマネスク様式はドイツでは少ないので，代表的な教会，例えばコブレンツ近郊のマリア・ラーハ修道院教会やマインツの大聖堂などの名だけを挙げた。

それよりも重要なのは，中世ドイツの文化の担い手であった騎士や聖職者の説明である。最近の高校生は日本史と世界史を全部やっていないため，世

界史におけるヨーロッパ中世社会の成り立ちをほとんど理解できない受講者がかなりいることがわかったので，歴史書を参照して，[5] 中世ドイツの社会を支配階級と被支配階級に分け，前者をさらにA）世俗の権力（治め戦う人），B）教会の権力（祈る人），の二つに分けた。被支配階級をC）農民，市民（働く人）として，それぞれの役割を示した。A）に属する皇帝--国王—領主—臣下が騎士である。騎士としてその名を教えるのはハルトマン，ヴォルフラム，ゴットフリート，ワルターぐらいであろうか。聖職者については，教皇—大司教—司教—僧院（修道院）長--司祭などのカトリック・ヒエラルヒーの名を挙げておくことは，次に扱う宗教改革のテーマにも役立つし，中世文化の担い手は騎士とならんで聖職者であったというように，つなげていくきっかけとなろう。

先に少しふれたように，修道院についてその起源から述べていくと興味深い文化論となるだろうが，研究書から「修道士の日課」を述べた。[6] 聖務日課の他に修道士は一日3，4時間の読書と，6時間ほどの労働を行なう。農耕，果樹園や野菜園の世話の他に，製粉やパン焼きもある。ここでビールの醸造の起源が修道院であることも述べることができた。9世紀後半の話として，フルダに学んだ僧オトフリートがはじめて聖書の注解を古高ドイツ語で書き，またスイスのザンクト・ガレン修道院では，ルートヴィヒ敬虔王によって院長に任命されたグリマルドがヴェルギリウスをはじめとするローマ古典を集めて図書館をつくったとされる歴史的な事実を述べた。

ここから中世におけるドイツの大学の創立に移った。アルプス以北のヨーロッパでは，大学は主として司教教会付属の学校から発展したのであり，1200年創立のパリ大学をモデルとして，神聖ローマ帝国内でも1348年プラハ大学，1365年ウィーン大学，1386年ハイデルベルク大学，1388年ケルン大学ができた。ケルン大学の歴史を簡潔にしるした大学案内が手元にある。1991年に訪問研究員としてケルン大学にいたときのものである。現在の大学のあり方，入学資格など学校制度についても説明することができた。文化史の中のこのような項目はすぐに，伝統が続いているので現在に接続できる。

できるだけ現在につなげるものを多くしたいと思った。

盛時の中世に成立した，異教的作品「ニーベルンゲンの歌」については，その元になっている，ニーベルンゲン伝説およびアイスランドの女王ブリュンヒルト伝説の内容を紹介したにすぎない。ライン河畔のヴォルムスにあったブルグンド王国とはるか三千キロ北のアイスランドとの交流は，スケールも大きくライン河畔に伝わる最大の伝説として知っておいてほしいと思った。

〔**第7—第12回**〕 6月からは近代の序曲として，宗教改革と人文主義の時代に入った。文化の担い手が騎士階級から市民階級へ移るところ，その時期1450年ごろにグーテンベルクの活版印刷術発明がある。そのあたりからを「市民文化の時代」として，トーマス・マンの言葉を借りるならば，その文化の頂点にある代表者ゲーテが生まれるまでの300年間を終えれば，春学期の目標は達成できる。しかし，6月の終り頃から7月のはじめにかけては受講者にも疲れがみえるので，6回のうち1回半をビデオを見ることで消費した。今年はオーストリアのバロック美術およびロココ美術を代表するウィーンの「シェーンブルン宮殿」のビデオを，オーストリア・フィルム制作の日本語版で，もう一本はプロシア王国の発展を示す王都ベルリンの文化遺産を撮影している「ベルリン」（文芸春秋制作，スーパーシティズの一巻）である。ビデオ上映中は解説できないので，内容のある解説をしてくれているビデオが必要である。「シェーンブルン宮殿」は宮殿をめぐる文化史のような構成になっており，1683年のオスマン・トルコ軍との戦いやマリア・テレジアのことなどを詳しく紹介してくれているし，「オーストリア」といった漠然とした内容のビデオよりははるかに具体的でよかった。

後半のポイントは，何といっても宗教改革者マルティン・ルターの業績と，それに関連して，今年死後250年のヨハン・セバスチャン・バッハ，反宗教改革の意図をもったオーストリアのバロックであった。

文化人を中心に，ドイツの文化を語れるのはやはり，ルターぐらいからではないだろうか。ルターの生涯については，キリスト教関係の著書の中に良

い本が多い。一例を挙げると，青山四郎著「マルティン・ルター」(1986年新教出版社，つのぶえ文庫17）は，日本ルーテル神学専門学校を卒業された著者の本で，現代青少年のためのキリスト教図書とされている。生いたちからはじまって，当時の大学生活，1513年ごろのいわゆる「塔の体験」の意味などが110頁ほどの中にうまくまとめられていて，大変参考になった。これをそのまま講義するわけではないが，百科事典などではわからない部分を，専門家の立場から教えてくれている。著者は「あとがき」の中で，ルターを大きな山にたとえ，「文化史の道を登る人，教会史の道を登る人，キリスト教信仰の道を登る人，経済学の道を登る人，音楽の道を登る人等は，それぞれすばらしい道がひらける」と述べている。全くそのとおりであり，宗教改革上の諸事件，聖書のドイツ語訳，人文主義者フィリップ・メランヒトンによるアウクスブルクの信仰告白などの話をしていると，すぐ2時間ほどになってしまう。しかし，第1回のアンケートにあった要望，「音楽の国ドイツがどのようにして成立したのかを知りたい」との期待に答える良い機会であった。ルターが教会の礼拝において聖俗の別を廃し，一般信徒が直接参加するのを望み，自ら作詩作曲したコラールを全会衆に歌わせたのは画期的なことであった。「讃美歌の父」としてのルターが，1525年10月29日にヴィッテンベルクの町の教会ではじめてドイツ語の礼拝を行なったこと，音楽を大切にしたことはドイツ文化論に欠かせないできごとである。ハイネが「宗教改革のラ・マルセイエーズ」だといった讃美歌「神はわがやぐら」は，日本語版の讃美歌267番にあるので，資料に歌詞を載せて，日本語で聴いた。ハイネの「ドイツ宗教哲学史考」(1835）や，トーマス・マンの講演「ドイツとドイツ人」(1945）の中の言葉も引用した。ただ，トーマス・マンなりハイネなりのドイツ文化論は，全体として高度な著作であり，大学1年生を主に考えるとむつかしすぎるように思われる。2年生用の「人文科学特論」であれば使えるであろう。

音楽の国ドイツの成立を語って，それを約200年後に生まれたバッハにつなげた。バッハ死後250年の行事がドイツでどのように行なわれたかについ

ては，秋学期の最初の講義でも紹介しておいた。昨年のゲーテ生誕250年や今年のバッハ関係の行事は，講義の材料になりえた。バッハあるいはベートーヴェン，ワーグナーなど音楽家の生涯と業績については，dtv-Atlas Musik, Band 2 (1985) を参考にした。Ulrich Michels 編のこの本は，Barock や Aufklärung, Klassik などの定義もあり，それぞれの芸術文化上の特徴が簡潔に説明されている。Bach については1頁が当てられており，その生涯は4つの時期，すなわち，Organist in Arnstadt / Mühlhausen 1703–08, Hoforganist in Weimar 1708–17, Hofkapellmeiter in Köthen 1717–23, Thomaskantor in Leipzig 1723–50 に分けられ，その後に作品がならんでいる。音楽の時間とは異なり，文化史のテーマとしてバッハを考えると，やはりルター派の熱心な信徒であるということになる。興味深いのは，ケーテンの時代で，そこのレオポルト公がカルヴァン派であったため，宗教音楽がほとんどなく，世俗の器楽曲が多くなっているという説明ができる。そのような観点からバッハをとりあげた。

17世紀について，ライプニッツを語ればもっとよかったのであるが，時間不足のためオーストリアのバロックへとテーマを移した。北のプロテスタントと対抗する意味で，オーストリアのバロックを反宗教改革運動の文化的な表現と規定した。それが後にドイツ語圏の二大勢力となるのであるから，ここでカトリックのオーストリアをとりあげておかないと不公平になる。オーストリアとスイスが，ローマ帝国内に入っていたことは重要であり，両国がラテン民族の文化の影響を受けたことを説明するため，ウィーンの歴史から入った。1世紀にローマ人によって都市の基礎が築かれ Vindobona とよばれた時代，976年にバーベンベルク家が Ostmark を与えられたこと，この王家によりウィーンが公国の首都になり，1200年頃にはドイツ語圏の重要な都市になったこと，その後ルードルフ・フォン・ハプスブルク以来のハプスブルク王家の発展まで，オーストリアだけの歴史について講義できくことは受講者にとってもはじめてのはずである。またマキシミリアン1世以来の宮廷文化や，イエズス教団の本処地グラーツ，30年戦争やオスマン・

トルコとの戦い，その際コーヒーがはじめてドイツ語圏に伝えられたことなども簡単にふれておいた。6月の終りに見た「シェーンブルン宮殿」のビデオは，マリア・テレジアの時代（ロココ文化）までを補強してくれた。

春学期の最後は，もう一度北へ戻って，プロシア王国の発展を中心に，ベルリンの歴史と文化の解説とビデオで終った。30年戦争後のベルリンについては，大選帝侯フリードリヒ・ウィルヘルム（1688年死去）の業績として，フランスの裕福なユグノーに信仰の自由，市民権，経済上の特権を与えた「ポツダム勅命」（1685）について，次のフリードリヒ3世による王都ベルリンの建設，バロック様式のシャルロッテンブルク宮殿の紹介で終りとなった。

以上が2000年春学期を中心とした筆者の講義内容である。ふり返ってみて抜け落ちている文化的事件が多い。例えば初期市民文化のマイスタージンガーや，民衆本ファウストの話，17世紀のオペラの誕生とその発展等様々である。しかし，文化論の講義ができることは意義深いことであり，今後も続くことを願ってやまない。2001年度も担当することが決っており，「地域文化論」（Ⅰ）は「ドイツ文化入門」，（Ⅱ）は19世紀末から20世紀のドイツ文化について講義を行なう。まさに終ろうとしている20世紀のドイツ文化をどのようにとらえていくか，新しい講義ノートの作成にとりかからなければならない。

注）

1) ヨアヒム・ケーラー著，橘正樹訳「ワーグナーのヒトラー」は，この問題を考える参考になった。戦後のバイロイト音楽祭が1951年に再開され，ナチズムの泥を落して出発したこと，フルトヴェングラー指揮のベートーヴェンの「第九」交響曲の話も加えて，ヒトラーのナチズムがワーグナーを利用し，誤用したことをまず説明し，それとは異なる説，つまりワーグナーを反ユダヤ主義の元凶とする説もあることを紹介した。筆者自身もこの問題をさらに研究しなければならないと考えている。

2) 平凡社「国民百科辞典12」，岩波書店「広辞苑」第三版などを参考とした。

3）「司馬遼太郎が語る日本」（1998年4月朝日新聞社）所収，1972年10月21日，富山市における講演の記録。

4）渡辺照宏著「仏教」岩波新書青版を参考にした。この本は，キリスト教とのちがいを大変わかりやすくさせてくれる。渡辺教授の外国語，サンスクリット，パーリ語に関する知識がすばらしい。

5）中央公論社から1960年代に出た，堀米庸三編「世界の歴史」3「ヨーロッパ中世」が参考になった。

6）今野国雄「修道院」近藤出版による。